

明治二十九年の虚子 (II)

— 『五百句』評釈と研究 —

小澤 實

山門も伽藍も花の雲の上

明治二十九年

初出は、「日本人」(明治二十九年五月五日)。

「春季雜詠」と題して左のごとく見える。

流れ出る柳の下の温泉垢かな 虚子

梅見えて菜の花の中に村一つ

猿かくひし夢や渚の朧月

子尼寺の桑摘何んぞ喧しき

名所かな春の曙笠を着て

花に豆腐味噌買ふことを忘れ男

山門も伽藍も花の雲の上

面白い話の中へ春の月

宮嶋

深潭に春日通りて魚もなし

十七日帰京

菜の花の関所を越えて帰りけり

以上十句の七句目に置かれている。

なお、「春季雑詠」は虚子の十句の前に、郭公の「春の夜や花を翳して美女遊ぶ」など二句、秋竹の「百敷の大宮普請春の風」など三句、漱石の「端然と恋をして居る雛かな」など三句、霽月の「阿迦桶や櫛の中の桃一枝」など三句、花叟の「大寺のしんく」として涅槃像」など三句がそれぞれ置かれている。

虚子は、同号に「故人五百題夏の句」も寄稿している。

掲出句において、異同はみえない。

*

この年二月、虚子は、長兄病気のため松山に帰郷している。「春季雜詠」最後から二句目、「宮嶋」とあるのは、三月に漱石の第五高等学校への赴任を送りつつ遊んでいるのである。最後「十七日帰京」とあるのは四月十七日。「虚子研究年表」には、「松山より帰京。4月」とあるが、それに日付を加えうる。

掲出句は、松山に帰郷中の作品であると考えられるが、それは確認できない。

*

「山門」は、寺院正面につくられた楼門。寺院は多く山に建てられたことから、このように名付けられたらしい。

「伽藍」は、僧が集まって仏道を修行する清浄閑静な所。寺の建物の総称。梵語 Sangharama (僧伽藍摩) の略。

伽藍を七堂伽藍と解釈すると、普通七堂とは、塔・金堂・講堂・鐘楼・経蔵・僧房・食堂じきどうを指すから、山門とは重複しない。ただ禅宗においては、法堂・仏殿・山門・僧堂・庫院・西浄・浴室を言うので、山門と重複する。普通の語感でも、伽藍は山門を含むように思う。

しかし、あえて、「山門も」と置いたことによって、この寺が山の上にあるだろうこと、そして山門を手前に、山の上にちらばっている建物のひろがりが見えてくるのである。

また芭蕉に「奈良七重七堂伽藍八重桜」がある。この句については後述したい。

季語は、「花の雲」。桜の花の一面に咲き連なっているさまを雲に見たてた表現である。

古い用例としては、『千五百番歌合』に、「花の雲間」というかたちであるが、

みねしらむ木末の空にかけ落て花の雲まに有明の月

藤原 忠良

がある。この歌は、『風雅和歌集』にも収録されるが、勅撰集にはこの用例しか見えず、歌語として一般的であるとは言えまい。ただ、雲に桜を重ねる和歌には

「面影に花の姿をさきだてていくへ越えきぬ峯の白雲

藤原 俊成『新勅撰和歌集』

などの用例が見られた。

謡曲においては、「吉野天人」の冒頭

ワキ三人「花の雲路をしるべにて。く。吉野の奥を尋ねん。
次第

そして、その結末、

ワキ「不思議や虚空に音楽聞え。異香薫じて花降れり。地「これ治まれる御代とかや。上歌「云ひもあへねば雲の上。く。
琵琶琴和琴笙筆策。鉦鼓羯鼓や糸竹の。声澄み渡る春風の。天つ少女の羽袖を返し。花に戯むれ舞ふとかや。中ノ舞地
「少女は幾度君が代を。く。撫でし巖もつきせぬや。春の花の。梢に舞ひ遊び。飛び上り飛び下る。げにも上なき
君の恵。治まるる国の天つ風。雲の通ひ路吹き閉づるや。少女の姿。留まる春の。霞もたなびく三吉野の。山桜うつろ

ふと見えしが。又咲く花の。雲に乗り。く／＼て行くへも知らずぞ。なりにける。

に見える。「第六天」には

上歌「桜の宮の花盛。く。花の白雲。立ち迷ひ空さへ匂ふ月読の。洩り来る影も長閑にて。知るも知らぬも道のべの。行きかふ袖の花の香に春一入の気色かな春一しほの景色かな。

と見える。また、「葵上」には

〔前略〕これは六條の御息所の怨霊なり。われ世に在りしいにしへは。雲上の花の宴。

と見える。謡曲の中では、「花の雲」はたしかな一語として、意識されているとは言いがたいが、「吉野天人」の「又咲く花の。雲に乗り。」は一例として掲げることができる。また、「吉野天人」の「花の雲路」、「第六天」の「花の白雲」も類する表現である。「吉野天人」は「雲」と「花」を近接して用いているが、遠方から見た桜と雲のみまがう効果をねらっているに違いない。また「葵上」の「雲上の花の宴」の「雲上」は「宮中」の意であるが、右のような効果も考えられているはずだ。

謡曲から、掲出句への直接的影響はないと思うが、「吉野天人」の「花」と「雲」が、現世に浄土の風景を現出しているあたりは、この句の背景として押さえておきたい。

浜中柑児氏は『虚子五百句鑑賞』に次のように述べる。

三尊来迎といつて、極楽浄土から、阿弥陀如来が観音、勢至三菩薩を従へて、死者を迎へに来るといはれてゐるが、その時の乗物は紫雲であつて、「笙歌遙カニ聞ユ孤雲ノ上、聖衆来リ迎フ落日ノ前」といふ詩の句は其の様子を詠じたものである。私は此の俳句を一読して、直ぐそんな三尊来迎の感じを起した。

七重八重に建てられた七堂伽藍の中の諸仏が、淡紅の雲に乗つて、欣求浄土の人々を招いてゐる姿である。此の世ながらの浄土の姿である。

謡曲「吉野天人」の「花」と「雲」のすぐ近くに、この鑑賞はある。

近世俳諧の世界において「花の雲」は、用いられてゆく。

『俳諧類松集』には、「偽」^{いつはり}の付合語として見えている。雲に見えて、実は花、(あるいは逆も)ということ、付合語となったのだらう。しかし、真に生きて用いられるには、芭蕉を待たなければならなかった。

芭蕉には、この語を用いた句が四句ある。

観音の薨見やりつ花の雲 貞享三年「真蹟懷紙」

草庵

花の雲鐘は上野か浅草か 貞享四年「統虚栗」

蝶鳥のうはつきたつや花の雲 貞享年中「やどりの松」

鶴の毛の黒き衣や花の雲 元禄六年「句選拾遺」

一句目、二句目は寺との取合によってできていて、本句への大きな影響が考えられる。それについては後述したい。また、「鶴の毛」の句は、「僧專吟餞別之詞」に付されていた。僧の墨染の衣を鶴の毛に譬え、その俗を離れさった心境を讃えているのである。つまり、これも釈教の句であるということが出来る。芭蕉四句中の三句が、釈教の句である。蕉門の句においても

普化去りぬ句ひ残りて花の雲 嵐 雪「類柑子」

麓まで米貫はばや花の雲 丈 草「薦獅子集」

会下僧の旅立つ跡や花の雲 北 枝「元禄十年日記」

などの句が見られる。

「普化」とは「普化宗」の僧のこと。尺八を吹いて托鉢する虚無僧こもぢである。普化宗とは唐の普化禪師が開いた宗旨を鎌倉時代に法燈国師が伝えたものである。その僧の句が残っているのである。

二句目の作者、丈草は、貞享五年、二十七歳にして遁世、僧籍にあった、自らの行乞の句と読んでいいだろう。

「会下僧」は、一寺を持たず、師のもとで学んでいる僧である。

「花の雲」とは釈教と取り合わせられることの多い語と言うことができよう。それは、先に見た謡曲において、浄土を連想させていたことと関係しているだろう。

*

掲出句の叙法の特徴として、「山門も伽藍も」と「も」を重ねている形を指摘することができる。その効果については、すでに浜中柑児氏が『虚子五百句鑑賞 明治之部』のなかで次のように述べている。

山門も伽藍もと「と」「も」の誤植か 小澤注を疊んでゐるのは他の多くの建築美と威容とを思はせてゐることはいふ迄もないが、尚その下に花の雲のと「の」を重ねて受け止めた調べから来る感じも此の句の内容を引き立てゝゐることを見逃してはならぬ。

「も」と「の」の繰りかえしによる効果は指摘の通りである。その調べは、屏風絵などに描かれている雲を連想させる。なお、本句の絵画性については、清崎敏郎氏の「一寸絵巻物みたいです。」という発言がある。（「研究座談会」三〇九）「玉藻」昭和五十四年一月号）

この「も」を重ねる形は、掲出句に見られるのみならず、『年代別虚子俳句全集』の同年明治二十九年を調べると次の四句を見出せる。

温泉の宿や表も裏も桃の花

宮島

回廊も鳥居も春の潮かな

山寺や庭も畑も梅の花

古寺や縁も厠も落椿

句に広がりを持たせるのに好適なる叙法として、この時期虚子が愛用していた。この四句と比較すると掲出句の美質が明らかとなる。この四句において並記されている二語は、「表・裏」「回廊・鳥居」「庭・畑」「縁・廁」と、同じ重さの釣り合ったことばである。それに対して、「山門・伽藍」は違う。山門は伽藍に含まれるような語であった。そして、それが、右の四句のような平板さから掲出句を救って、深い奥行を与えていたのである。また、右の四句は、近景の句であり、掲出句のみが、遠景の句であった。

そして繰りかえしによって遠景を詠おうとする点では、先に引用した。

花の雲鐘は上野か浅草か 芭蕉

の「か」の繰りかえしが響いている。右の句は『芭蕉翁全伝』においては

しかるに花の名だかきは、先初花を急ぐなる、近衛どのゝ糸桜、見わたせば柳さくらをこきませで、みやこは春のにしき散乱たり。

という前書を付している。謡曲「西行桜」の一節である。シテ、老桜の精の洛中洛外の花の名所尽しを、江戸にまでひろげたところに、この句の俳意があった。

この句と対になっているのが、先に掲げた次の句である。

観音の薨見やりつ花の雲

観音は浅草観音、深川から眺めた浅草寺の薨である。この句にも、謡曲「西行桜」からの引用による前書がある。

毘沙門堂の花盛、四王天の栄花も是にはいかでまさるべき。うへなる黒谷・下河原。むかし遍昭僧正のうき世をいとひし花頂山、驚の深山の花の色、枯にしつるの林までももひしられて哀なり。

先の句の前書による引用のあと、すこし略したのち、引用を続けている。『末若葉』は、この二句を「一聯二句の格也。句ヲ呼テ句とす」としている。「鐘は上野か」は聴覚によって「観音のいらか」は視覚によって「花の雲」を把えている。この対称的な把え方によって一聯と呼びうるものとしている。

そして、この両句が、掲出句に影響を与えている。「鐘は上野か」の句は、先に述べたように、繰りかえしの調子における影響である。「観音のいらか」の句は、寺院の建造物の一部を花の雲に点じている構成において、まさに掲出句の先蹤となるべき作品であった。

芭蕉のこの二句について、虚子が評釈を加えている。

観音のいらか見やりつ花の雲 芭蕉

花の雲といふ言葉が現してをるやうに、一面に咲き満ちてをる桜は、恰も雲が棚曳いてをるやうである。その上に観音の御堂は少々反つた薨を載せて聳えてをる。花の雲の中にその薨を見たといふことをいつたのである。たゞ見たといふだけでなくつて、その薨に目を止めてじつと見たといふ心もちが、「見やりつ」といふ言葉の中に出てをる。

同時にその観音の薨が花の雲の中にはつきりと、目に映るやうになる。芭蕉の句の力のあるところである。

(中略)

草庵

花の雲鐘は上野か浅草か　芭蕉

芭蕉がその草庵に閉ぢ籠つてをると鐘の音が聞える、遠くに花の雲が棚曳いてをつて靨曇とした春の日である。あの鐘は上野の寺で鳴らす鐘か浅草の寺で鳴らす鐘かと疑ひを抱いたのである、かりに疑ひを置きはしたものの、上野であらうが浅草であらうが強ひて聞きさだめようとは思はない、たゞ霞の深い花の雲の処々に棚曳いてをる大江戸の一隅にあつて、上野か浅草かどこか知らぬが鐘の音が響いて来る、といふ其時の茫洋たる感じを述べたものであらう。

〔評釋　芭蕉八十一句〕（『芭蕉』昭二六年中央公論社刊所収）

芭蕉の句八十一句中に入るののであるから、虚子にとって愛着のあつた句なのだろう。ただその愛着が、いつごろから生まれたのか、現在では確かめる方法がない。

ただし、この時点において、虚子は、芭蕉の全作品を見ている。「朝貌日記」（『年代順虚子俳句全集 第一巻』所収）に次のとき記述がある。

八月二十五日。（明治二十八年—小澤注）朝貌美しく咲けり。机を庭に向けて一葉集を繙く。（後略）

一葉集は『俳諧一葉集』、文政十年刊の芭蕉全集である。明治二十五年に復刻がなされているので、こちらを見た可

能性もある。

「観音」の句における虚子の評釈は、「見やりつ」ということばに「たゞ見たといふだけでなくつて、その叢に目を止めてじつと見た」という微妙な心持をとらえている。掲出句には、「見やりつ」の語は用いられていないながらも、「山門も伽藍も」という描写によって、単なる「見る」ではない「見やりつ」の心持を感じさせる一句となっている。

なお、「鐘は上野か」の句は、正岡子規の「芭蕉雑談」新聞「日本」(明六・一一・三三―三七・一・三三)において、

其外格調の新奇なる者には

芭摘んで貧なる女機による

梅若菜鞠子の宿のとうろ汁

奈良七重七堂伽藍八重櫻

花の雲鐘は上野か浅草か

関守の宿を水鶏にとふものを

昼顔に昼寝せうもの床の山

隠れ家や月と菊とに田三反

送られつ送りつはては木曾の秋

蛤のふた見に分れ行く秋ぞ

さればこそあれたきまゝの霜の宿

かくれけり師走の海のかいつぶり

格調に於て芭蕉の変化せる此の如し。されば後世に至りて蕪村、暁台、一茶等が少しく新調を詠み出でし外は毫も芭蕉の範圍外に出づる者あらざりき。(傍点のみ小澤)

のごとく引用されている。子規が評価する一句であった。

また、子規の引用のこの句の前に、「伽藍」語釈の際に触れた

奈良七重七堂伽藍八重櫻

が置かれている。桜と七堂伽藍との配合は、先の「観音のいらか」と同様に、掲出句の先蹤となる。そして、虚子への影響という点から見ると、「芭蕉雑談」所載の「奈良七重」の句もまた重いだらう。ただ、この句はすべて名詞で漢字表記であることと「七」「七」「八」という数字合わせが芭蕉の興の中心であって、句は像を結びにくい。

掲出句に影響を与えている芭蕉の三句を見ると、それぞれ寺を特定できる。花の雲の二句は、言うまでもなく、「奈良七重」の句も奈良の町中にある興福寺あたりと絞ることができる。ところが、虚子の句の寺は、特定できない。どちらかといえば、虚に傾く。ここに掲出句の、そして、この時期の虚子の特徴を見ることができる。「神仙体」と呼ばれる虚構につよく傾いた作品と、ほぼ同時期につくられているのである。「神仙体」については、拙稿「明治二十八、二十九年の虚子」(「信州豊南女子短期大学紀要第6号」所収)において触れた。

伽藍は、なかば幻のように花の雲の上に広がっている。

*

正岡子規は、「高浜虚子」(「日本人」第三十一号・明治二十九年一月号所収、「ホトトギス」第二号・明治三十年二月号に転載)の中で、最後に「其外」として分類できなかった十一句を並べているが、その四句目に掲出句が見える。